

生涯学習施設としての博物館の役割と可能性について －韓国における新たな博物館教育の動向－

畔柳 和枝

(愛知淑徳大学非常勤講師)

【要旨】

今日博物館は生涯学習時代における自由な学習の場として、地域や学校との連携、教育プログラムの充実、専門スタッフの育成などの教育普及活動のあり方が模索されている。特に韓国の国立中央博物館と国立民族博物館では、生涯学習施設を活用した学びのネットワーク作りを目指す教育改革の影響から、博物館を学びとケアを実現する学習共同体と位置づけ、博物館と学習者、学習者間の「ケア(尊重、信頼、連帯、関心という共同体意識の造成)」を中核とする教育プログラムの実践により、エンターテインメント性を求める従来の傾向とは一線を画した、博物館の新たな役割と可能性を示す教育普及活動を展開している。それは現代の教育課題に挑戦する大きな成果を提供するものである。

1. はじめに

(1) 研究の背景と目的

かつて福沢諭吉の『西洋事情』(1870)の中で「世界中ノ物産古物珍物ヲ集メテ人ニ示シ見聞ヲ博クスル為ニ設ルモノナリ」¹⁾と記された博物館の役割は、公立博物館の設置及び運営に関する基準の改正(2003)によって、博物館事業への市民(青少年、高齢者、障害者、外国人等)参加促進へと視野が広がり、現在その動向は利用者の学習成果や知識、技能を生かした市民と共にある博物館創りへと向けられている²⁾。それは資料、情報、人のネットワーク等を活用した教育普及活動をはじめ、調査の結果や研究成果の公開を通して人々との接点の拡大を図ることで潜在的な利用者にも開かれた学習施設として大きな可能性を示唆するものである。特に利用者が多様な文化や歴史の相互理解とその共生を図る上で新たな創造性を生み出すための仲立ちとなる博物館教育は、これからの博物館像や日本の生涯学習に新しい地平を開く重要な活動として位置づけられ、さらには博物館の社会貢献を積極的に推し進めてきた欧米の影響から、教育プログラムのあり方を見直すことで博物館の存在意義を高めようとする動向が顕著化している。

文化の多様性やグローバル化が進み、人々が持つ経験や背景、コミュニティとの関わり方も個々に異なる現代社会において、博物館の役割のひとつは利用者が学びを通して性別や人種、宗教などに関わらず自分と同じ社会に暮らす仲間として他者と対等な関係を結ぶ共同体の精神を養うことと考える。近年、日本でも博物館見学を取り入れる外国人ツアーが増え、博物館は新たな利用者層を獲得しようとしている。また筆者が行ったアンケート調査³⁾からも、日本に訪れる(居住者も含めて)外国人の博物館に対するニーズは非常に高い。一方、博物館の対応は外国語による展示プレートやパンフレットの作成に留まり、英語によるレクチャーやガイドは国公立博物館においても不定期で、作品解説のイヤホンの

設置も大規模な設備を有する博物館に限定されている。こうした状況の中、博物館は外国人学習者を視野に入れた教育プログラムの開発と同時に、異なる文化を持つ人々が多角的な物の見方や感じ方を深く感受し、共に経験する教育プログラムの開発に取り組むことが急務である。

そこで本稿では、近年教育プログラム開発の活発化がみられる韓国の2つの博物館の取り組み—学びを外国人居住者と市民とを繋ぐツールとして捉え、国籍を問わず学習者同士が対等な関係の中で様々な学習に参加し、互いの価値観や思考が変化していく体験を共有しながら異文化理解への積極的志向と共同体の精神を育成することを目的とした外国人教育プログラムの実践—から、博物館教育における「ケア(博物館と学習者間、学習者間における尊重、信頼、連帯、関心という共同体意識の造成)」⁴⁾の概念とその重要性を示し、日本の現状との比較を行いながら、生涯学習施設としての博物館の役割と可能性について考察する。日本では90年代の美術館建設ブーム以降、大衆性を獲得することを先行したために資料の地道な調査や研究にけるウェイトが低下し、博物館で行うべき調査や研究と、それを教育活動につなげていくための議論が起りにくい状況⁵⁾にある。本研究はそうした博物館と博物館教育のあり方に、ひとつの方向性を示すものとする。

(2) 研究方法

本研究の目的を達成するため、以下の調査を実施する。まず韓国の博物館教育への理解を深めるため、韓国国会図書館と国家記録院で収集した資料と文献、研究者へのヒアリング調査を基に、博物館設立の歴史とその変遷の中で形成された博物館教育について整理する(第2章博物館教育の変遷)。

次に、本稿で取り上げる2つの教育プログラムの諸相と学習の実態について、博物館でのフィールドワークによる情報収集及び、受講者と博物館の教育担当者へのヒアリング調査から明らかにする(第3章学びとケアの博物館教育)。

さらに、教育プログラムに参加した受講者の反応とその学習効果について①国立中央博物館、国立民族博物館における受講者へのアンケートとヒアリング調査(2007～2010年)及び、②博物館の教育担当者へのヒアリング調査(2009年10月)から検討する(第4章調査の概要と結果)。

最終章では国立中央博物館、国立民族博物館、東京国立博物館、国立西洋美術館、韓国の研究者、丹青研究所へのヒアリング調査(2009～2010年)を基に日本の現状との比較を行い、博物館教育におけるケアの概念とその重要性を示し、博物館の役割を考察する。

その他、海外と日本に居住する外国人と外国人観光客(計80名、6カ国)への日本の博物館に対する外国人の意識調査(2010年1～4月)から、日本における外国人教育プログラム開発の必要性を示す(第1章研究の背景と目的)。

2. 博物館教育の変遷 (1) 慶州子ども博物館学校

韓国の博物館は日本の植民統治時代から独立後の市民運動の高揚、その後の国の文化政策など、時の政治や社会勢力に翻弄されながら、その運営や教育普及活動の内容も大きく転換がなされてきた⁶⁾。韓国において近代的な性格を持つ博物館施設が創設されたのは、1909年に朝鮮王朝最後の王、順宗が「名君は民とともに楽しんだ」として宮廷内に大韓帝国帝室博物館(動植物園、博物館)を設立し、翌年に一般公開されたことに起源を持つ⁷⁾。

1945年の独立回復以降、韓国の博物館は発展期を迎え、国立中央博物館が朝鮮総督府跡に開館すると共に、博物館は国民の民族精神を養うための市民教育の場という役割を求められるようになる。これは近代史の混乱期の中で文化財の保存と管理を確固とする意図、民族文化の振興、文化的主体性の回復による国民の統合という政策的意図から始まった国の文化政策によって、その運営と活動が管理された国立博物館体制へと転換されたことを意味するものであった⁸⁾。

さらに同時期に勃興した文化財の保存を求める市民運動の流れの中で地方型博物館の建設が急がれる中、1954年に慶州国立博物館の館長ジン・ホンソプと地元の国文学者ユン・ギョンリョルによって韓国初の博物館教育となる、慶州こども博物館学校が設立された(現在は新羅文化同人会が運営している)⁹⁾。これは朝鮮戦争直後の社会的、経済的に厳しい時期に「文化財への愛は、幼い頃から植えよう¹⁰⁾」という主旨から作られた韓国初の子供教育プログラムでもある。慶州は新羅千年の古都であり、先祖の姿を街にある遺物から学ぶという恵まれた学習環境を利用した学習活動は、当初は地元の小学生100人程を対象に、毎週末1時間、年間を通して実施することが計画された。現在は子供の好奇心を刺激するような伝統文化と地域の歴史に関する講義や遺跡見学、実習などの30以上の講座で構成され、特に学校の教科と連携した体験学習プログラムはメディアに度々紹介されている。

80年代に入ると、こども博物館学校の体験型学習が注目されるようになり、84年には国立民族博物館(1946年設立)がその活動を子供向け教育プログラムとして導入したことで、展示物を活用した体験型の教育普及活動が多く博物館で試みられるようになり、こども博物館学校は韓国における博物館教育の方向性を示すものとなった。

(2) 学びの共同体としての博物館

日本の学校教育では、完全学校週5日制に関連する博物館等の「土曜日の子供向け無料開放の拡大」(平成14年)の動きに伴い、生涯学習施設としての博物館の役割が注目されている一方、韓国の学校教育では1980年以降から学校外教育活动として歴史系博物館での学習体験が取り入れられてきた。当時韓国では、いじめの問題や不登校生が急増し、その対策として民間のフリースクール(代案学校)を中心に展開されていた代案教育(農業や陶芸、調理やフィールドワーク、ボランティアなどの学習体験を通して子供の様々な個性を伸ばしていく教育法)への関心が高まり、90年代には大学受験に偏重した既存の教育に疑問を投げかける代案学校設立運動や行政主導による学校外の代案教育プログラムの運営に発展した¹¹⁾。さらに民主的市民の育成を重要視する進歩派政権の影響から、芸術や文化に関する教育普及が求められるようになり、博物館の役割は足を運ぶ習慣を持たない市民に対して、身近な生活空間を舞台に選びながら作品に触れる機会を提供していくことが最大の焦点となった。それは地域社会との関わりの中で、公共的価値を持つ社会的機関としての責任を果たすという博物館の新たな方向性を示すものであり、2004年の国際博物館協議会(ICOM)主催の世界博物館会議の開催においてさらに明確なものとなる。この大会の意義は国際的規模の博物館会議が初めてアジア地域(ソウル市)で開催されたこと、博物館と文化遺産に関する理解と交流がグローバルな次元で議論されたことで各国が世界文化の多様性を正しく理解し、世界を平和と文化の時代へと導くための博物館の役割について話し合う機会を提供したこと、日韓の博物館の間でも議論が交わされたことにある。特に日韓の議論において、両国の博物館の今後の課題は互いをよく知り、見解の交換を続けていくスタ

ンスを持つことで博物館が抱える共通の諸問題を解決していくこと、さらに教育普及活動を通して互いに対する間違ったイメージが根付くことのないように国民を導いていくという目的が示されたことは大きな成果としてあげられる。加えて、博物館の管理を担当する政府の部署の文化観光省と教育担当の教育人的資源省をひとつの組織にまとめ、新たな芸術教育政策の立案を進行する試みが始動したことから、韓国の博物館教育は現代の博物館が持つ多義的な対社会的機能を明確に定立する基準として捉えられるようになった。

3. 学びとケアの博物館教育

(1) 国立中央博物館の日本人向けプログラム

このプログラムは海外赴任などで韓国に住む日本人を対象としたもので、その目的は誰もが容易に接することのできる文化を活用し、韓国の文化に馴染みのない日本人が異文化への関心や理解を深め、異なる人種に対しての尊重や連帯感を持つような学習体験を社会生活に適応する手段として活かしていくというものである。現在ソウル市には25万人以上(全国は約100万人)¹²⁾の外国人が居住し、国際都市の仲間入りを果たしつつある社会の中で他者への関心に対する意識の高まりと外国人観光客の増加傾向により、博物館における外国人教育の発展に大きな期待が寄せられている。

2005年に郊外の広大な敷地に新設され、連日多くの観光客や留学生が訪れている国立中央博物館は、外国人の61%が再訪問する意思を示し、76.5%が他人にも勧めたいと回答する程の外国人にとって満足度が高い博物館である(2008年国立中央博物館調べ)。加えて、植民地時代には慶福宮内に、独立後は朝鮮総督府跡に移され、総督府が取り壊された後に現在の場所に移転した経緯から、国民にとっては歴史と共存した意味深い博物館でもある。

また、この博物館は国内最大規模の子供博物館を併設しており、ハンズオン(子供たちが目で見て手で触り、心で感じられるように構成された)の体験型博物館は、平日でもプログラム参加の予約を取ることが難しいほどに家族連れの間で人気が高い。

子供博物館では2007年にソウル市内に在住する日本人の子供とその家族を対象に教育プログラムを実施した。これは同年に佐賀県立美術館と共同開催した展覧会の中で「国立中央博物館で会いましょう!」と銘打った日韓文化交流の推進と韓国文化の理解を深めるワークショップを開催したことがきっかけとなり、以後博物館の教育プログラムとして定着している。

プログラムの内容は主に韓国の歴史や文化理解に関するもので、最初に歴史順に作られた展示コーナーを学芸員のレクチャーを受けながら巡り、その後に想像力を働かせるための様々な伝統工芸の体験学習を親子で行うという構成である(第1表を参照)。そして、約20名の参加者に対して、エドューケーター(教育担当の学芸員)1名と日本語を勉強する大学生や主婦などのボランティアスタッフの約3名によって進行される。筆者が見学した「韓国のタコ作り教室」は民間の文化センターとの共同開催で、エドューケーターは作品の作り方と、それが実際にどのように使われていたのかをスライドを使いながら解説をし、ボランティアは参加者のテーブルを回って一緒に作業を行いながら子供たちやその両親の手助けや、韓国の生活様式や子供の遊びについて自己の経験をもとに解りやすく説明を行っていた(第1写真を参照)。

第1表 調査対象の教育プログラム

1. 民族文化学習 2007年11月
韓国体験の日 家族対象プログラム
-教育名 : 博物館と隣人になる- 韓国体験の日
-教育対象 : 日本人小学生連れの10家族
-教育内容 : わら細工作り
2. 季節行事体験 2008年10月～2009年10月
-教育名 : 韓国のタコ作り教室
-教育対象 : 日本人小学生連れの10家族
-教育内容 : 韓国伝統のタコ工作

第1写真 韓国タコ作り体験¹⁵⁾



博物館教育におけるケアを実現するうえで、ボランティアの存在は大きい。彼らは韓国の文化や歴史と子供たちを繋ぐ役割を持っており、普段の生活では接する機会のない歴史を子供の立場から読み取って理解し、またエドューケーターのレクチャーをさらに理解し納得するための役割をも担っている。通常はエドューケーターが行う仕事をボランティアと共に行うことで、細やかな配慮をより多くの学習者に向けることが可能になる。さらに子供たちから受け取った質問を博物館側に伝えることで、子供たちに一番近いプログラムの批評者としての役割も果たしている。学習者の反応をプログラムに活かすことは、充実した内容を学習者に提供することに繋がる。また、ボランティア自身も教育活動に参加して外国人と接することで異文化について発見し学び、自国の文化を伝えることの一端を担うことへ誇りと責任を通じて、博物館の役割と仕事に対する理解や共同体意識も深まる。

一方、参加者にとってエドューケーターやボランティアは一番身近な外国人である。最初は緊張した面持ちであった子供たちの表情が、彼らの兄や姉、友人のような気さくな態度に触れることで和らぎ、後半では「きれいだな」とか「面白いな」、「私は知っている」、「へえ、そうなのか」といった小さな驚きや関心を共に享受する楽しみの表情へと変化していた。こうした学習者と博物館との交流が両者の相互理解を支え、子供たち自身が自分との相違点や共通点を実感として受け止める学習によって、日常生活における行動の価値的変容を促すことが可能になる。

これまで韓国の博物館は文化遺産の収集や保存、研究や展示に関心を向けており、身近な存在である市民や隣人(日本)に耳を傾ける事と博物館を発展させていく事を別の問題として捉える傾向にあった。しかし更なる発展を模索していくうえで他者への眼差しを持つことが不可欠であり、それは急成長する韓国社会でも同様に求められているリテラシーでもある。そして、博物館教育にケアという概念を介入させることでそれを可能にした教育プログラムの実践は、従来の博物館に新たな役割と可能性を示したと捉えることができる。

(2) 国立民族博物館の多文化家族プログラム

国立民族博物館では市民と外国人労働者、結婚移民たちが共に体験学習を行いながら、コミュニケーションと互いの文化理解を図るための体験型文化交流プログラムを運営している(第2表参照)。当館は景福宮の敷地内に位置し、市民は無形、有形の文化遺産にじかに触れながら韓国の伝統的な生活と文化を学ぶことが出来るようになっている。さらに

2000 年から文化交流教育課が設立されたことで、博物館教育の内容のバリエーションが広がったことも博物館の特徴としてあげられる。この文化交流教育課が運営する「多文化家族」プログラムは、手工芸制作、季節行事体験、民族文化学習が包括的に組み込まれた文化交流プログラムで、中国、ベトナム、タイ、フィリピン、日本などの国籍を持つ女性の結婚移民とその家族、女性の韓国人市民を対象として週 1 回、3 時間程度の講座を 1 ヶ月半という長期にわたって受講するというユニークな学習形態を取っている。

第 2 表「文化の多様性」プログラムの学習内容

期間：1 ヶ月半(春と秋の週 1 回) 1 回 3 時間程度	
対象：結婚移民者・労働者とその家族、一般の韓国人	
人数：25 人前後 費用：無料	
学習内容：	
1 週 祖国の文化紹介	6 週 韓紙(はんじ)手工芸体験
2 週 韓国茶道体験	7 週 キムチ作り体験
3 週 伝統料理体験	8 週 母国模様のスカーフ作り
4 朝鮮時代の祭祀見学	9 週 韓国舞踊体験
5 週 伝統管楽器体験	10 週 親睦会



第 2 写真 韓国茶道体験¹⁶⁾

プログラムは受講者同士の自己紹介や祖国の文化紹介から始まり、ここから異文化への配慮と理解を持つことの重要性について学習する。そして韓国茶道体験やチュソクと呼ばれるお盆の祭祀、キムジャンと呼ばれる家庭でのキムチ作りなどの季節や伝統行事の体験を通して韓国古来の礼節や文化的価値観などを学習する。特に受講者が共に料理を作り食する体験は異なった人種の距離を自然に、そして急速に縮めることを可能にする役割を果たしている。こうした文化的な交流機会を提供することで、受講者同士の関係に共同体意識が生まれ、他者との調和を目指していく。博物館の教育担当者は、当初は移民たちに韓国の民族伝統の理解を深めて文化を普及させる目的であったプログラムが、結果として公共性の強い内容を提供することで幅広い層の受講者の共同学習が可能になり、そこから健全な社会の確立に貢献するという新たな目標へと繋がったと述べている。

近年、韓国社会も核家族化や家族関係の希薄化が顕著になっており、日本人を妻に持つ受講者の家族からは、プログラムの参加が異文化理解以前に家族間のコミュニケーション機能の回復と、理解と尊重を持つことの重要性に改めて気付いたという意見が聞かれた。また外国人受講者(ブラジル人)が受講者(韓国人)と共に韓国の文化を祖国に正しく伝えるボランティア活動に参加したという教育担当者の話から、受講者同士が相互に影響を与えながら学習を展開し、その学習経験が社会問題の解決に取り組む意欲に繋がったことが理解できる。その他、受講者へのインタビュー調査からは「移民と触れあい、その文化を実際に知ること、これまで抱いていた外国人に対するイメージを変えるきっかけになった」というような外国人に対して抵抗感が薄れたという価値観の変容と、異人種間の交流への参加と貢献について関心を持ったという意見が目立った。

ケアを中核とする教育プログラムの実践には、研究者としての学芸員の専門性が重要視されており、中でもプログラムの主題やその背景にある深い原理を学習者に明確に伝えることや、学習者の質問対応や研究指導などは博物館への信頼性を図る重要なコミュニケー

ションとなる。例えば多文化社会の中で人々がお互いの存在を認め合い、他者との調和を目指す学習が継続的に展開されていくように、プログラム終了後も受講者同士が交流を図る談話室として、また共通の目標を持つ学習者の研究の場としての部屋が常時開放されている。学芸員はこういった市民研究者たちを支援し、地域の団体を主体にバックアップする活動も行いながら学習者の信頼を獲得し、学習者との共同体意識を造成していくことで学びとケアを実現する学習共同体としての博物館づくりに努めている。以上のように、博物館が社会や人々のメッセージを敏感に受け取り、それを博物館の資源を有効活用しながら学習に反映することで個人と集団の創造性を高め、その成果を日常生活に活かしていく博物館教育の実践は、博物館の役割と可能性に新たな方向性を示すものと捉えられる。

4. 調査の概要と結果

以下の受講者へのアンケート調査は、それぞれの博物館の教育プログラムに参加した受講者の反応とその学習効果について示したものである。第3表は①で3回、②で2回、第4表は2回のアンケート調査を実施した。また、受講者の性別と人数は第3表で①男性17名、女性43名、②男性8名、女性52名、第4表で①男性13名、女性27名、②男性4名、女性56名であった。表に実施した回数すべての結果を記載したのは、継続的なプログラムの実践によってケアを実現するという学習目的が果たされているかを総合的に把握するためである。その際に自由回答欄を設けたことで、受講者のプログラムに対する具体的な評価についても検討することができる。

第3表 プログラムの評価－①国立中央博物館

②国立民族博物館

問1 プログラムに参加して良かった？ 1a. Yes13, b. No7 2a. Yes17, b. No133aYes14, bNo6	問1 プログラムに参加して良かった？ 1aYes27, bNo3, 2aYes21, bNo9
問2 bを選んだ理由に最も近いものは？ 1a. 内容4, b. スタッフの対応2, c. その他1 2a. 内容7, b. スタッフの対応4, c. その他2 3a. 内容3, b スタッフの対応2, c. その他1	問2 bを選んだ理由に最も近いものは？ 1a. 内容2, b. スタッフの対応0, c. その他1 2a. 内容0, b. スタッフの対応3, c. その他6
問3 プログラムにまた参加したい？ 1a. Yes13, b. No7 2a. Yes15. bNo5 3aYes14, bNo6	問3 プログラムにまた参加したい？ 1a. Yes24, b. No6 2Yes23. No7

①回答者数60名、2007～2009年の11月(計3回) ②回答者数60名、2009～2010年の4月(計2回)

第4表 学習成果の活かし方－①国立中央博物館

②国立民族博物館

問1 このプログラムを今後も続けて欲しい？ 1a. Yes17. b. No3 2Yes20. No0	問1 このプログラムを今後も続けてほしい？ 1a. Yes26, b. No4 2Yes27. No3
問2 学習成果をどのように活かしたい？ 1 異文化理解 10, 2 外国人との交流 8, 3 その他 2 1. 異文化理解 10, b 外国人との交流 6, c その他 4	問2 学習成果をどのように活かしたい？ 1a 異文化理解 12, 2 外国人との交流 15, 3 その他 3 1a 異文化理解 28, b 外国人との交流 26, c その他 6

①回答者数60名、2007～2009年の11月(計3回) ②回答者数60名、2009～2010年の4月(計2回)

まず第3表の問1では、プログラムに対する評価は①②とも高い。aの回答者の感想欄には「忙しい毎日がリフレッシュできた」、「学校でもこんなに楽しく勉強したい」、「作品作りに夢中になった」など、日常とは別の時間を体験できた点を評価するものと、「学芸員の話から日本と古代から交流が盛んであったこと、両国がそれぞれ影響を受けあっていたことを実感できた」、「韓国の文化に親しみを覚えた」、「自分の国と似ている所がある」、「ボランティアの人たちと一緒に作るのはとても楽しかった」、「韓国の子供たちと一緒にプログラムを受けたい」という内容に着目して積極的な学習参加への意思が感じられる意見が多く見られた。

これに対しbを選んだ回答者の意見は「体験学習にあまり興味が持てなかった」、「子供が作るには少し難しいモチーフだと思った」、「受講する前に民族の歴史について学習すればもっと理解できた」など内容に関するものが最も多く、利用者志向のプログラム作りの検討を示唆する意見が目立つ。また博物館スタッフに関する言及には「参加者の人数のわりにスタッフの数が少ない」、「ボランティアとのコミュニケーションが上手く取れなかった」、「韓国語が話せない人のフォローがあまりできていないように思う」等、参加者とのコミュニケーション方法の見直しを必要とする内容が寄せられていた。

問3は①②とも平均90%以上がaを選び、「来る前より心が軽くなった」、「もっと自分の国と韓国の歴史や文化を勉強したいと思った」、「今まで抱いていた韓国人(日本人)の印象が変わった」、「仲間ができたことが嬉しい」など、他者との邂逅や自己の再発見について述べられていた。それ以外に①ではプログラムの内容と開講数の少なさを指摘する意見、②では受講時間が長いという意見が多くみられた。

第4表は受講者の学習成果の活かし方について示したものである。問1では、ほとんどの受講者がプログラムに学習の意義を見出している(平均95%)。なかでも韓国の文化と歴史理解に言及した受講生(①20名、②40名)は、「韓国に対する興味がわいた」、「これ以外の文化体験もしたい」、「日本の文化を韓国の人に伝える機会を作って欲しい」などの異文化への関心が更なる学習意欲へと繋がっている。また、外国人との交流に(①14名、②41名)に関しては「ここで友人ができた」、「交流する機会がもっと欲しい」、「文化交流に関する活動に参加したくなった」など、学習体験で得た受講者同士の連帯や異文化への尊重の気持ちが新たな学習へと促している。その他「学ぶことが楽しいと感じた」、「自分の国のことを知らないことに気づいて向学心がわいた」という自己啓発のための学習(①6名、②9名)は、プログラム内容や学芸員への信頼性をはかる重要な意見として捉えられる。しかし「学習内容に興味を持てなかった」、「母国語のプリントやテキストがあれば良かった」という意見(bの選択者)から、学習内容と方法についての課題も残されている。

先のアンケートの結果に対し、両博物館の回答は利用者との関わり、対応体制の整備、継続的な実践について検討し、それを今後の課題としたいというものであった。特に第4表の問1のbに関して、国立民族博物館の李女史は日本の博物館教育の特徴は学ぶ側の理論が考慮された学習プログラムが計画されているが、韓国では博物館側の価値観が先行しているので、利用者の学習理論に関する研究が必要と指摘している。これは単に技術的な問題に留まらず、学習者がすでに持っている知識や価値観に新しいアイデアを取り組む方法を思考するという、他者への眼差しに力点を置いた博物館教育におけるケアの重要性を示すものである。しかし、受講者の関心が自己から他者へと向けられ、その他者への関心

を学習からさらに深めたいという強い探究心と学習意欲を持つ受講者が多いことは調査からも明確であり、それは教育プログラムの成果として捉えることができる。

この2つのプログラムは単に外国人教育や文化交流のためではなく、学習者が人間社会の多様性を強く意識し、それを普遍的なものとして受け入れることで、日常生活で生じる他者との隔絶を回避する機会を提供している。それが可能になるのは、学習者との出会いの場でどのようなケアを実現させていくのかを博物館の本質に関わるテーマとして、学芸員たちが自覚的に捉えているからに他ならない。

5. おわりに ―ケアを中核とする生涯学習施設―

韓国の学芸員は博物館教育におけるケアの概念を、言語能力が未熟で韓国に対する知識が少ない子供や外国人が、学習で生じる疑問や日常生活の問題を気軽に尋ねることができる学習環境を提供すること(信頼)、体験学習は自国の文化と韓国との比較を実感として深く理解することが可能になること(関心、尊重)、さらに日頃感じている韓国社会の違和感に自分なりに折り合いをつけ、その違いの中に共通点を見つけることでコミュニティでの人間関係を円滑に保つきっかけになること(連帯)と捉えている。これに対し韓国の研究者は「文化には同質性、異質性があるが日韓の文化の違いを認識してこそ韓国文化の特色も見え、国際文化や国際交流についての感覚が育つ。そのため外国人のみに韓国の歴史教育を施すのではなく、両国民が互いの歴史や文化について知の情報交換が行えるような教育プログラムを日韓の博物館が共同で開発し、専門スタッフを育成することで、ケアは教育力ある概念として評価することができる」と指摘する¹³⁾。

これらの意見も踏まえ、本稿で取り上げた2つの教育プログラムに関して日本の博物館と博物館関係者に意見を求めた。そこから博物館教育におけるケアについての見解とプログラム実践の問題点が明らかになった。まずケアについては、学習者は単に文化や歴史、人間等の情報の伝達確認だけを博物館に求めているのではなく、博物館へ足を運ぶことでしか感じ得ない、例えば学習者の感覚や思考におのずと変容が迫られ、心が揺り動かされるようなかけがえのない体験を求めている。韓国ではこのような体験を自己と他者との関係の中から見出すことに着目し、学習者に共創的知の世界を作ることの楽しさを提供することでケアを実現している。こうした学びと深く結びつくケアのあり方は今後さらに博物館と学習者双方から問われていくだろうといった、興味や理解を示す意見が多く聞かれた。

これに対し、学芸員の業務量が増えること、概念や思考の探求学習がむしろ学習者の歴史や文化の明確な理解を妨げること、ケアを中核とする教育プログラムの指導者がいないことなど、博物館の運営システムと教育プログラムの意義と目的の捉え方の違いから、日本で実践することの難しさを指摘する声もあった。これらの意見は、日本におけるプログラムの実践についての課題として、今後さらなる検討が必要である。

現在、韓国の博物館は広域自治体ごとに地域博物館協議体が編成され、生涯学習施設として市民の多様な要望に対応する事業の構想と実践、「学びのネットワークづくり」を事例とする大学の研究機関との連携、政府主導による文化的コンテンツの作成が推進されている。しかし一方では、成績を上げることのみが学習の概念になったことで、子供たちの学習能力の低下、いじめや登校拒否、教師と両親との葛藤、若年層の自殺者の急増など日本でも問題視されている危機的現象が懸念されている¹⁴⁾。こうした側面からも、人々が共

通の目的を持ち、相互理解に基づく共同体意識を高め、新しい知の創造や他者との関係を築くことは現代的意義を持つ緊急の課題である。博物館教育における「ケア」の実践と、それを実現する学習共同体としての博物館あり方は、市民と共に様々な課題に向き合い、その学習拠点となることを目指す生涯学習施設にひとつの方向性を示すものとする。

注

- 1) 福沢諭吉『西洋事情』慶応義塾大学出版会、2009、p. 28
- 2) 「公立博物館の設置及び運営に関する基準の改正について」(文部科学省
http://www.mext.go.jp/b_menu/public/2003/03060602.htm、2010年9月10日参照)
- 3) 外国人①海外に居住 40 名、②日本に居住 30 名、③観光客 10 名を対象に「日本の博物館を観光したいか?」という質問(インターネットによる)に対して Yes の回答者①33 名、②17 名、③7 名という結果であった。
- 4) 孫千正「学びの共同体を基盤とする授業改革に関する研究」『教育学研究』韓国教育学会、2004 博物館教育におけるケアの概念は、生涯学習施設を中心とする「学びの共同体」づくりの一環として、学びとケアを実践する授業創造から学校改革を支援するという 2005 年から推進されている釜山大学教育研究所の学校改革モデル開発研究から創出された概念である。
- 5) 丹青研究所「ミュージアムは資源の価値を顕在化させる装置である」『ミュージアム・データ No. 76』丹青研究所、2010、p. 6
- 6) 李成茂『朝鮮王朝史(下)』日本評論社、2006、p. 431 韓国の博物館は、国立・公立・私立と大学博物館に分類され、現在 500 を超える館は韓国博物館協会に登録している。
- 7) 前掲 6)、p. 11
- 8) 韓国の博物館教育に関する研究(博物館教育の歴史)朴 燦一、宮崎清『韓国の博物館の歴史の変遷と現状および課題』デザイン学研究 44(5)、日本デザイン学会、1998 / 국성하『우리박물관의 역사와 교육』혜안、2007 (外国人教育) 김희영「외국인을 위한 한국 전통미술교육 방안에 대한 연구 : 박물관 교육을 중심으로」『漢陽大學校韓國教育問題研究所제 23 권제 2 호』教育論叢、2007、pp. 25-55 (多文化時代の博物館教育) 김중대『다문화시대박물관교육』국립중앙도서관、2009 김인희『다문화시대박물관교육한국박물관교육학회학술총서 03』문음사、2009 (博物館教育の分析) 교육철학회、『박물관과 교육』, 문음사、2001/ 강인애『중이책박물관교육의 다양성』문음사、2010 / 존포크『박물관교육의 기본』미진사、2005 / 国立民族博物館編『歴史展示のメッセージ』UM Books、2004
- 9) 국성하「경주 어린이박물관학교 연구」『教育史學研究 제 13 집』학술지논문 2003、pp. 119-141. 학술지논문 2003、pp. 119-141
- 10) 新羅文化同人会とはユンよって 1945 年に創立された。慶州に関心を持つ人々によって構成され、主な活動内容は慶州の文化遺産の保護と同時に子供博物館学校に物的、人的な援助を行うことである。
- 11) 橋本慶男「韓国における新たな学校改革の動向」『アジア民族造形学会研究報告 1』アジア民族造形学会、2008、p. 21 代案学校は 2006 年に各種学校の一類型として法律上規定され、高校課程を卒業するときに卒業認定試験を受け、それに合格すると小学校から高校までが学歴として認められる。韓国には現在、約 500 の代案学校がある。
- 12) 「韓国の人種別外国の人口」(朝鮮日報 <http://www.chosunonline.com/>、2009 年 4 月 21 日参照) 出身地別では中国が 19 万 2618 人で圧倒的に多く、米国が 1 万 2821 人、台湾が 8818 人、日本が 6840 人、ベトナムが 4652 人。
- 13) 文普玄(문·보히ョン)氏へのインタビュー(2009 年 10 月)
- 14) NICE「Education in Korea」NICE、2000~2001
- 15)、16) 筆者による撮影(2008~2009 年)